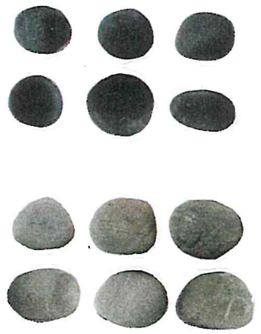
たな　そこ　じょう　あと

棚　底　城　跡

お館に住む棚底城主は、中央の文化人に習って茶の湯をたしなみ
城詰めの侍たちは、海岸から拾い集めた小石で碁を囲んだ

〔面取風炉〕



〔碁石〕

２００４年

くまもとけん　あまくさぐん　くらたけまち
熊本県天草郡倉岳町教育委員会

ごあいさつ

今日、全国的に市町村合併が推進されていますが、本町でも、このことが大きな行政施策の一つとなっています。『倉岳町』という行政組織が消え去ろうとする中で、町の歴史を後世に継承することは、今に生きる私たちに課せられた責務であります。そこで、我町では平成13年度から町史編纂事業に取り組んでいるところです。

棚底城跡調査は、その一環として平成14年度から実施してきました。「高城（たかじょう）」あるいは「城頭（じょんあたま）」と呼ばれる上揚地区の丘陵は、古くから城跡として語り継がれてきましたが、詳細な事は永らく不明でした。近年においても、昭和51年度から３ケ年、熊本県教育委員会が実施した「中世城跡悉皆調査」により、わずかな遺構が確認されただけで、今日まで竹や雑木に埋もれていました。それでも、中世文書の『八代日記』には、棚底城を巡って、天草五人衆の上津浦氏と栖本氏による「棚底城争奪戦」の顛末が幾度となく記されているだけに、専門家の間では本格的な調査が待たれていたところでした。

調査にあたり、当初は、縄張り確認のための地形測量を目的としましたが、調査が進むにつれて、県内最大級の「海城（うみじろ）」である事が判明し、急遽、発掘調査も実施する事になりました。これまでの成果の一部は、本報告書で述べているとおりです。特に全国的にも珍しい茶の湯道具の「石製風炉」が出土するに及んでは、戦慄さえ覚えました。

最後になりましたが、本調査に際し、御指導を賜った熊本県立鞠智城・温故創生館の大田幸博館長、文化庁記念物課の磯村幸男主任調査官・伊藤正義調査官、熊本県文化課、地権者の方々、(株)くらたけ、(有)大迫工業、(有)中村建設工業の各位に厚く御礼を申し上げます。

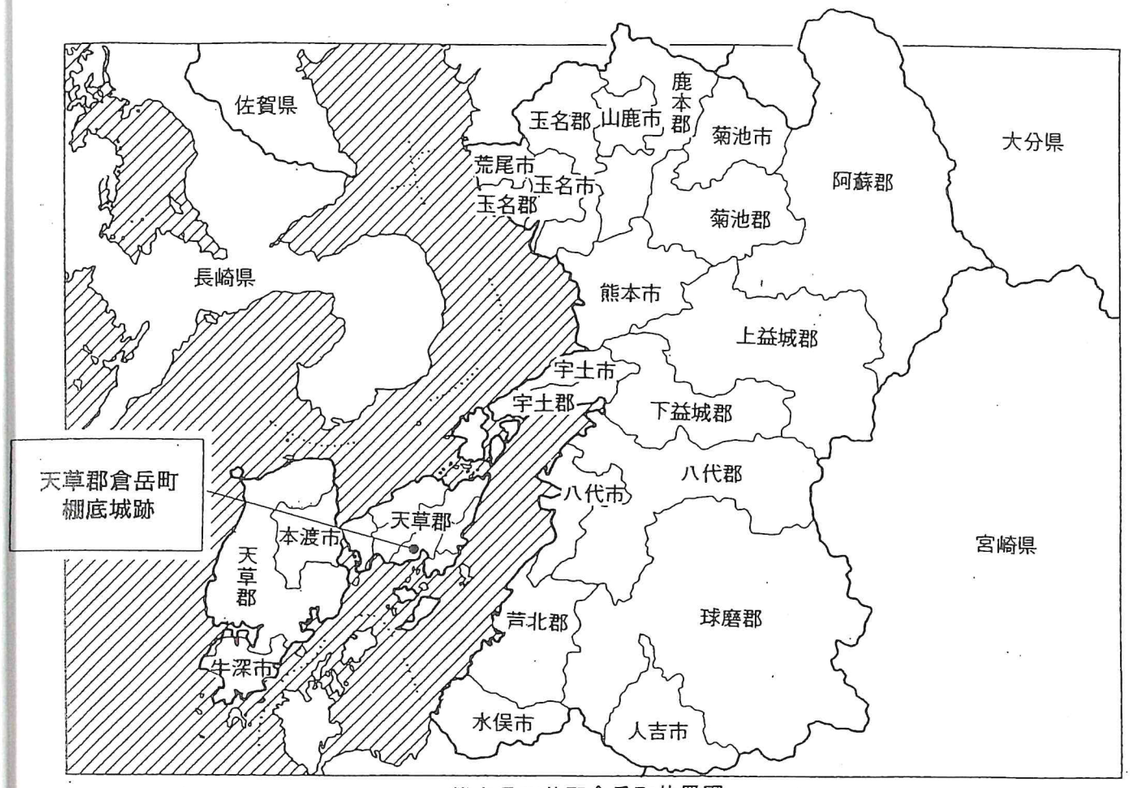
本調査が、倉岳町発展の礎の一つとして、また、今後の中世城跡研究の一助となるよう祈念します。今後、町ではこれまでの調査を基に、貴重な城跡の保存・整備に向けて英知を結集していく所存です。関係各位のさらなる御指導を賜れば幸いかと存じます。

平成16年7月31日

熊本県天草郡
倉岳町長　稲　津　俊　徳

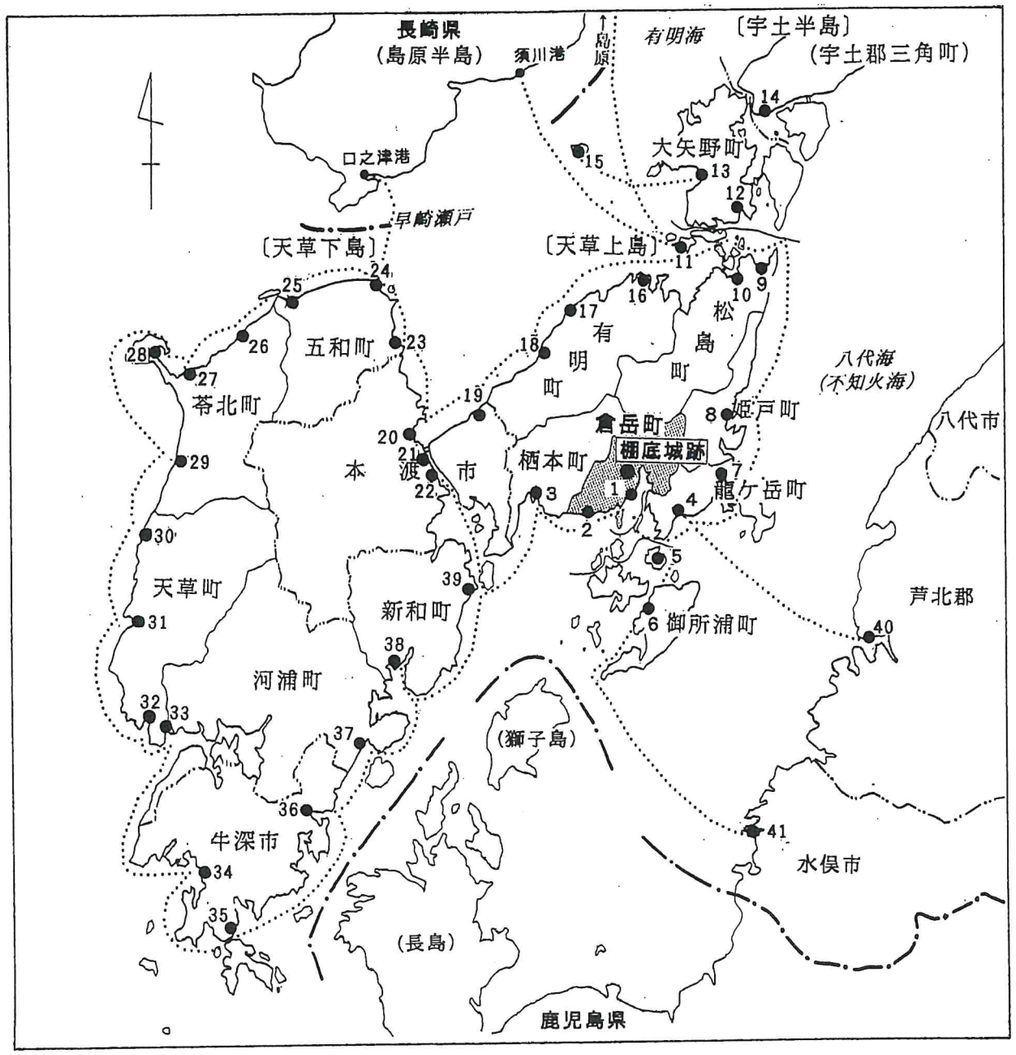
【調査組織】

調 査 主 体	熊本県天草郡倉岳町教育委員会
	蓮田陽之介（倉岳町教育長）　森田敏朗（教育課長）
調査担当者	歳川喜三生（文化財係長）　森田洋介（日本考古学協会員）
専門調査員	今村克彦（熊本城整備復元専門員）
	大田幸博（熊本県鞠智城・温故創生館長）
	東坂和弘・西島眞理子（文化財建造物保存技術協会）
	阿蘇品保夫（元 八代市立博物館長）
	大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館・副館長）
資 料 整 理	石工みゆき・溝口真由美（人吉・遺跡調査事務所）



熊本県天草郡倉岳町位置図

棚底城跡　航空写真　（南東→北西）



棚底城と天草海上交通図

1	たなそこ 棚底港	8	ひめど 姫戸港	15	ゆしま 湯島港	22	にしきじま 錦島港	29	とろろ 都呂々港	36	ふかみ 深海港
2	みやだ 宮田港	9	まつしま 松島港	16	おおうら 大浦港	23	ごりょう 御領港	30	しもだ 下田港	37	かみひら 上平港
3	すもと 栖本港	10	あいつ 合津港	17	あかさき 赤崎港	24	おにいけ 鬼池港	31	たかはま 高浜港	38	なかた 中田港
4	おおどう 大道港	11	ひあい 樋合港	18	こうつうら 上津浦港	25	ふたえ 二江港	32	おおえ 大江港	39	おおたお 大多尾港
5	よいちがうら 与一ケ浦	12	やなぎ 柳港	19	しまご 島子港	26	さかせがわ 坂瀬川港	33	さきつ 崎津港	40	はかりいし 計石港
6	ほんごう 本郷港	13	えびと 江樋戸港	20	ほんど 本渡港	27	じき 志岐港	34	おにき 魚貫港	41	みなまた 水俣港
7	たかど 高戸港	14	みすみ 三角港	21	おおもん 大門港	28	とみおか 富岡港	35	うしぶか 牛深港		

棚底城跡の概要

発掘調査は、倉岳町が町史編纂事業の中で取り組んでいます。平成14年度から開始して今年度で３年目になりますが、一環して、政府の緊急雇用対策事業に乗ったものです。

城跡は、天草の上島(かみしま)の南側海岸線に位置します。棚底(たなそこ)地区の山付きにあって、城跡からは、遠く海の向こうに水俣(みなまた)・芦北(あしきた)地方の山も望めます。県内最大級の海城(うみじろ)で、北側背後の倉岳(標高682.2m）末端の一尾根に築かれています。緩傾斜をなす痩せ馬状の尾根に、計八箇所(Ⅰ～Ⅷ)の郭(小平場)が造り出され、各段の法面には、野面積み(のずらづみ)の石塁を見ます。破城(はじょう)によって上位が壊されていますが、これらは、土留めを兼ねた「張り子の虎」的なものと考えられます。低い石垣ですが、敵勢には、かなりの威圧感を与えたものと思われます。

地形の括れ部となる西側の鞍部には、３条の堀切が並列します。内側は、特に大規模造りで、Ⅰ郭の直下にあり、北端部は東側へ回り込んで空堀(からぼり)となっています。縁に残る土塁は大半が削り取られて、痩せていますが、これは、破城の際に空堀の埋め土として、利用されたからでしょう。破城の度合いは、かなり強かったようです。

発掘調査によって、程度の差こそあれ、全部の郭から岩盤を掘り込む数多くの柱穴が検出されました。驚くべき調査結果で、県内においては、類例を見ない出来事でした。その中でも、Ⅰ郭から検出された掘立柱建物跡は、柱穴の並びと広がりから「お館(やかた)」的なものと見なされます。同時に、南下の小段(こだん)からは、これに併設された「舞台」と思われる５条の杭列跡も発見されました。Ⅰ郭からの海の眺めは、絶景です。城主はこの景色をお庭として借景し、舞台では能などを舞って来客をもてなしたのでしょう。中世城の建物を推定する上で、画期的な発見でした。柱穴の側壁には、力強い鑿(のみ)跡がくっきりと残っていました。中には、縦位に刻まれた粗い鑿跡を消すために、横位に廻らしたものもありました。こうすると滑らかな壁面になりますが、柱穴の掘り込みに芸術性は求められません。不思議な作業で、理解に苦しみます。職人のこだわりによるものでしょうか。一方で、皿状の掘り込みもありました。これは、岩質が硬い箇所に遭遇したため、途中で放置されたものと思われます。全体的に見て、柱穴の造りは、Ⅰ郭よりもⅡ郭の方が良好で、明らかに技術が進歩しています。学習効果のたまもので、Ⅰ郭からⅡ郭の順に工事が進んだ事も意味します。

これまでに、多量の輸入陶磁器が出土しました。当時、盛んに海外貿易が行われた証で、四方を海に囲まれた天草の土地柄を表しています。さらに、茶の湯に用いられた石製「風炉(ふろ)」や、海岸から拾い集めた簡易な碁石も見つかりました。風炉や碁石からは、平時における城の生活を伺い知る事が出来ます。城は、戦(いくさ) の副産物であるだけに、貴重な出土遺物です。お館に住む城主は、茶の湯を嗜み、城詰めの兵士は、碁盤を囲んだ事が分かります。

中世文書の『八代(やつしろ)日記』によれば、城は、天草五人衆の上津浦(こうづうら)氏と栖本(すもと)氏の争いの場となり、天文13年(1544)に３回、弘治２年(1556)に２回、永禄元年(1558)に１回、同３年(1560)に１回、同９年(1566)に１回の競り合いがありました。

倉岳
九州自然歩道
木場野
矢筈城
棚底城跡
城山
宮田城跡
棚底
歳川
倉本
横道
町
岳
小崎
宮田
西の原
大宮田
小辻潟
中形浦
たい養殖場
横島
0
1000m

棚底城跡位置図

八代日記における棚底に関する事項

天文十三年甲辰（一五四四）
二月二日　上津浦親類中、棚底下城、
四日　上津浦親類中、上津浦城下城、
六日　（上津浦）種教上津浦下城、

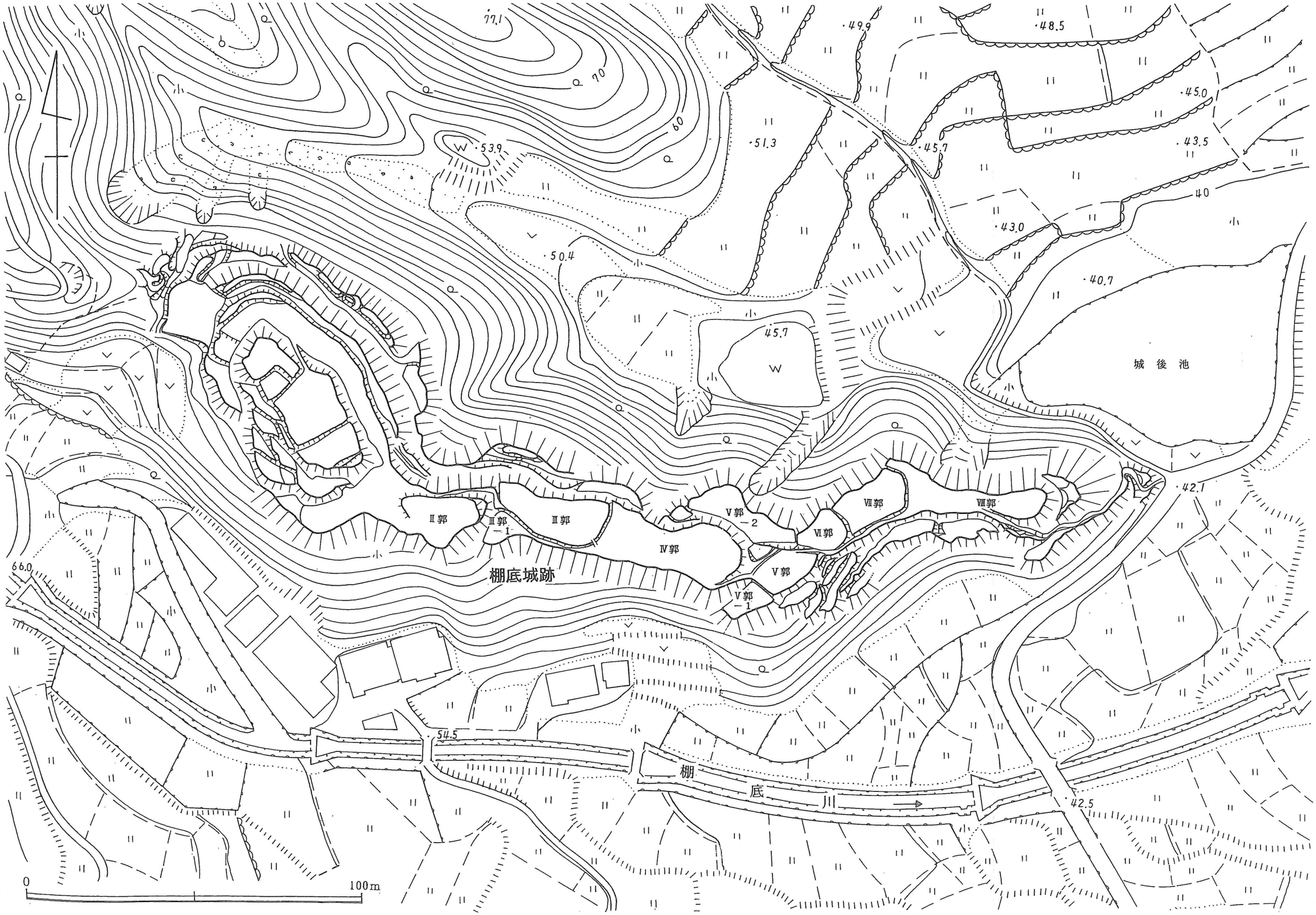
弘治二年壬（丙？）辰（一五五六）
四月廿九日ニ天草一揆中ニ光勝寺使僧候、五月九日ニ帰候、豊州仰次之事、
六月一日戊子　上津浦ヨリ棚底之内、藤川拵破候、
十一月
同七日壬戌　上津浦ヨリ棚底さかたぬき破候而、打取五人、生取五十三人、牛馬卅疋、

永禄元年戊午歳（一五五八）
三月十六日　上津浦ヨリ棚底ニ動、嶋子ヨリ下津浦ニ動候、

永禄三庚申歳（一五六〇）
二月十九日　自上津浦ヨリ年頭ノ書音、
同廿六日　自上津浦ヨリ棚底ニ動、栖本衆三人打候、今日歟、
同卅日　大矢野ヨリ八代年行へ使僧、右之動之儀ニ棚底申達之事、
四月四ニ桑原平三方高津賀まて被越候、夫ヨリ天草のことく又退出、
十一月二日甲子日　東左京亮方、天草殿ニ為合力行候、十二月六日ニ帰陣、
同十三日　有馬衆如上津浦開陣、
同十九日辛巳日　棚底之事、自栖本ヨリ上津浦へ被渡候、廿日ニ有馬諸勢如有馬帰陣、
同廿五日　上津浦ヨリ延命院を以八代奉行まて被仰候、御異見を以棚底請取申候とての御禮、
十二月三日ニ頼房さま御帰宅、俄御帰宅、天草斗遣之条歟

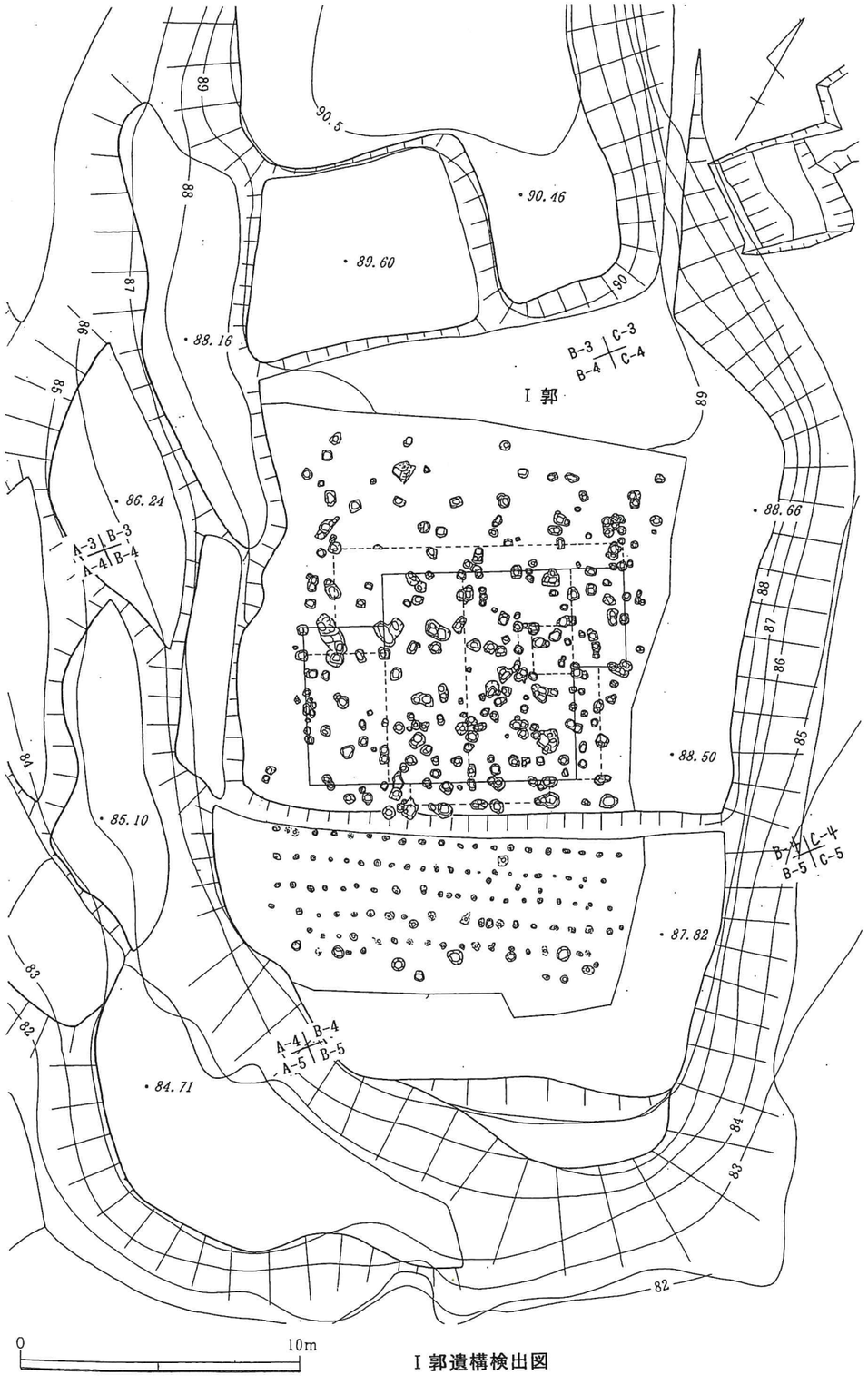
永禄九丙寅年（一五六六）
二月二日　宇土取乱、行直ト賀悦方の間事ナリ、美作上津浦ニ此前ヨリ山中候ヲ、帰住させられ候て、宇土ニテ成敗、
四月六日　上津浦ヨリ栖本動、麦作拂、
同日夜、栖本ヨリ棚底ニ麦作カリ候ヲ、あふこ百卅本おい落候、
同十五日　上津浦ヨリ八代年行ニ音信、

柵底城跡　航空写真　Ⅰ期・Ⅱ期　(北東→南西)

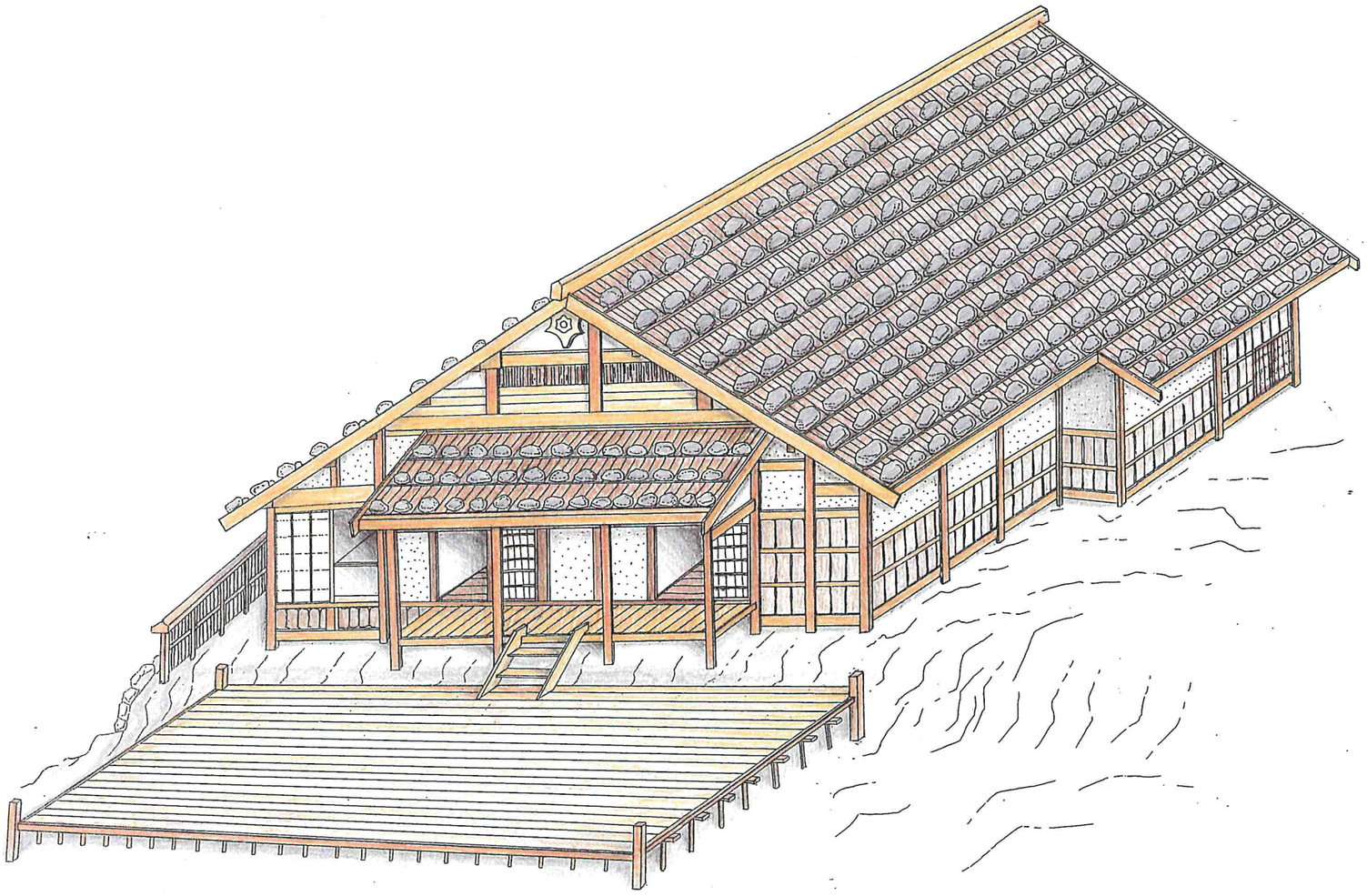

77.1
70
60
53.9
49.9
48.5
45.0
43.5
40
51.3
45.7
43.0
50.4
40.7
45.7
城後池
42.1
Ⅱ郭
Ⅲ郭－1
Ⅲ郭
Ⅳ郭
Ⅴ郭－2
Ⅴ郭
Ⅴ郭－1
Ⅵ郭
Ⅶ郭
Ⅷ郭
棚底城跡
66.0
54.5
棚
底
川
42.5
0
100m

棚底城跡周辺地形図

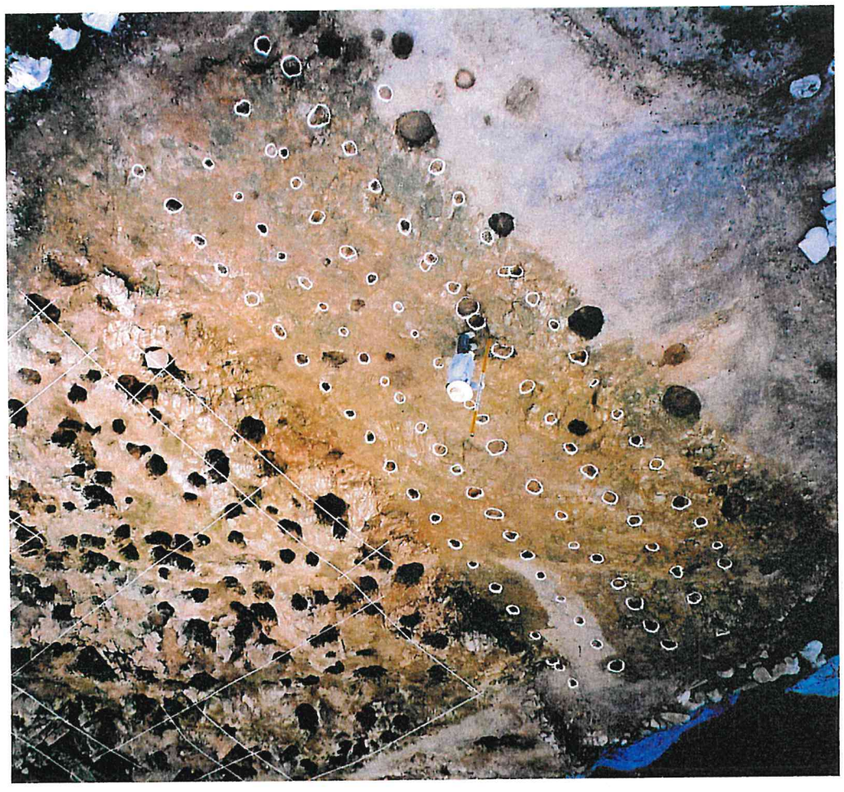
棚底城跡全体図


90.5
90.46
89.60
88.16
86.24
88.66
88.50
85.10
87.82
84.71
I 郭
A-3 B-3
A-4 B-4
B-3 C-3
B-4 C-4
B-4 C-4
B-5 C-5
A-4 B-4
A-5 B-5
0
10m

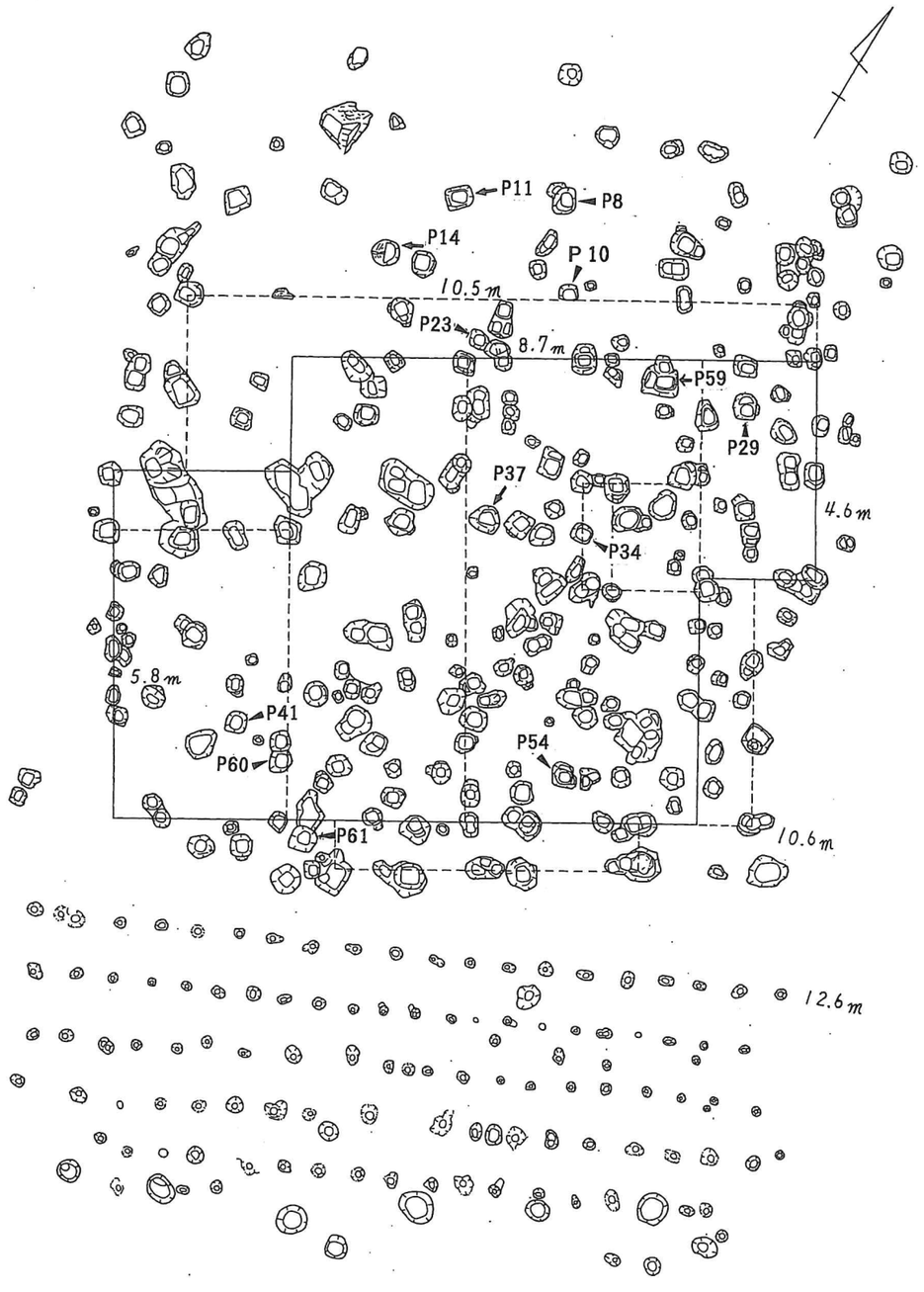
I 郭遺構検出図



I 第検出建物跡　館跡　（北→南）



Ⅰ第検出建物跡　舞台跡と館跡



0　　3 m

Ⅰ郭検出建物跡　館跡

（P番号は次頁の柱穴写真と対応する）

Ⅰ-P8（底部に根石）

Ⅰ-P23（底部に根石）

Ⅰ-P11

Ⅰ-P59

Ⅰ-P14

Ⅰ-P29

Ⅰ郭　柱穴検出状況

に根石)

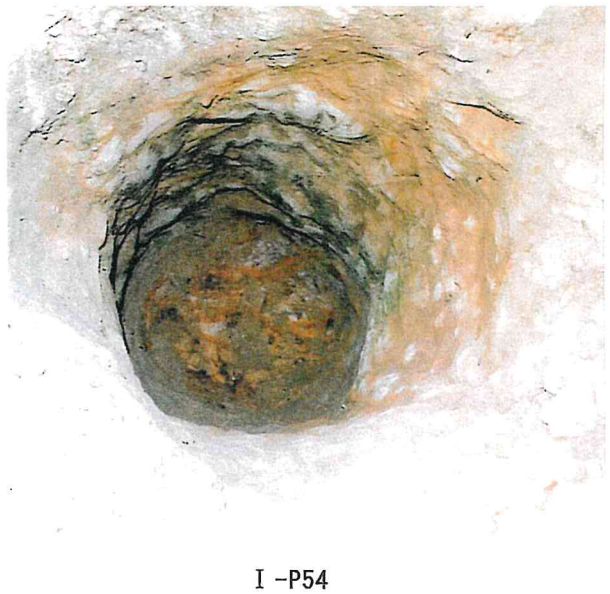
Ⅰ-P37

Ⅰ-P60

Ⅰ-P34

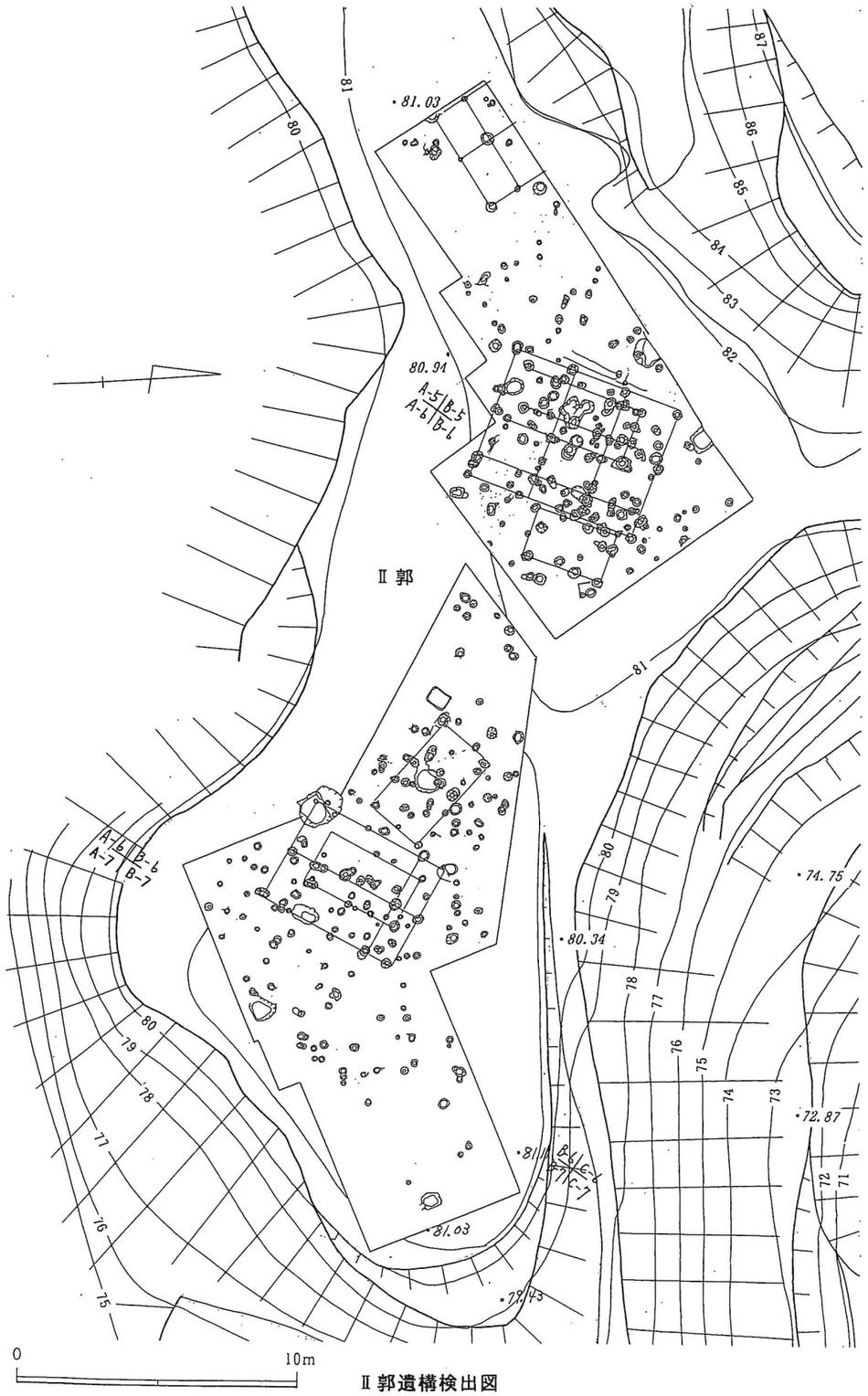
Ⅰ-P61

Ⅰ-P41

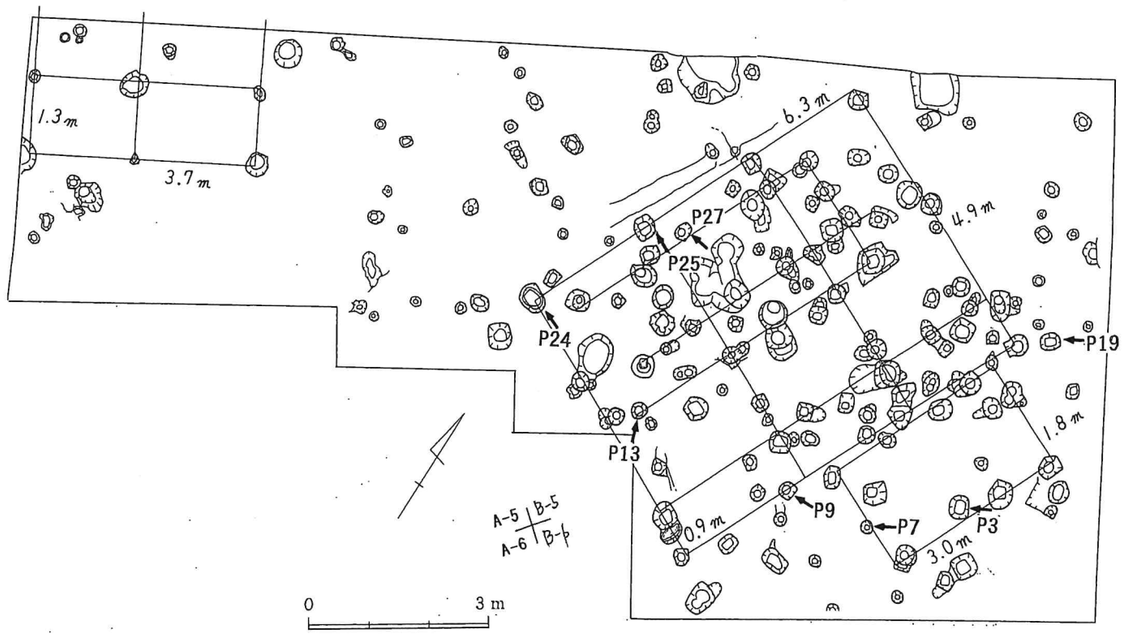


Ⅰ-P54

Ⅰ郭　柱穴検出状況


Ⅱ郭
81.03
80.91
A-5 B-5
A-6 B-6
A-6 B-6
A-7 B-7
80.34
74.75
72.87
81.03
78.43
0
10m

Ⅱ郭遺構検出図



Ⅱ郭西側トレンチ検出建物跡

（P番号は次頁の柱穴写真と対応する）

Ⅱ-P3

Ⅱ-P7

Ⅱ-P9

Ⅱ-P13

Ⅱ-P19

Ⅱ-P24

Ⅱ郭　柱穴検出状況

Ⅱ郭東側トレンチ検出建物跡（P番号は次頁の柱穴写真と対応する）

Ⅱ-P25

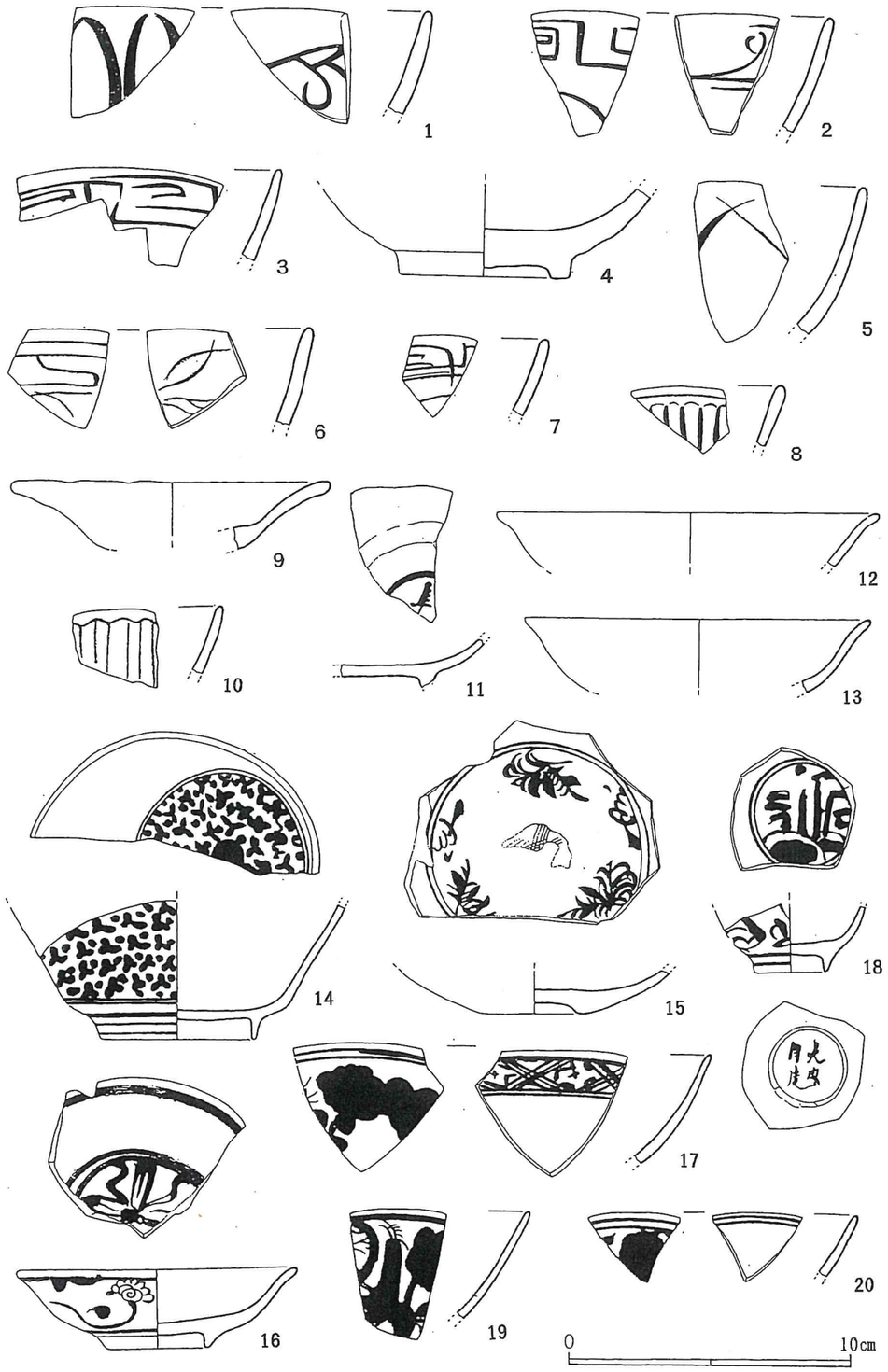
Ⅱ-P27

Ⅱ-P43

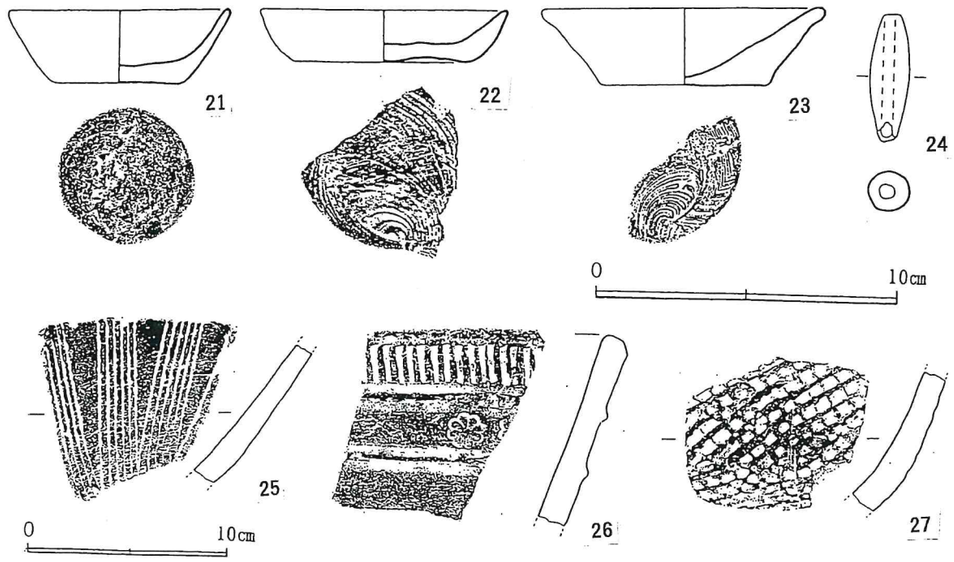
Ⅱ-P47

Ⅱ-P56

Ⅱ郭　柱穴検出状況



棚底城跡Ⅰ郭出土遺物実測図①



柵底城跡Ⅰ郭出土遺物実測図②

全て、Ⅰ郭から出土した遺物です。この中で、3・14・17は柱穴から出土しました。青磁・白磁・染付けは、いずれも中国から輸入されたものです。

①青磁(1～11)

11が景徳鎮窯、他は、全て竜泉窯で生産されました。1～6は、14世紀後半から15世紀中葉、7は15世紀代、8～10は、15世紀から16世紀前半、11は、16世紀中葉から末のものです。1には、内外器面にヘラ描きの蓮弁文様、5は、外器面に同文様が見られます。2・3・6・7の外器面には、口縁部に雷文様が描かれ、2・6の内器面には、ヘラ描き文様も加えられています。8・10の外器面には剣先蓮弁文様、9の内器面には櫛描文様、11の高台内には銘の一部の「年」がみられます。

②白磁(12・13)

いずれも景徳鎮窯で、12は16世紀代、13は16世紀から17世紀初頭のものです。復元口径は、12が13.5㎝、13が12.2㎝を計ります。

③染付け(14～20)

いずれも景徳鎮窯で、14は15世紀末から16世紀前半、15は15世紀末から16世紀中葉、16は16世紀前半から中葉、17・18は16世紀後半、19・20は16世紀後半から17世紀初頭のものです。呉須による文様は、14の外器面と内底面に小花群、15は内底面に貼り付けの魚、16は外器面に花唐草、内底面に十字花、17・19・20の外器面に花草、さらに17の内器面には四方襷が見られます。18には、高台内に「大明年造」銘。内底面に蓬来山文様があります。16は端反形の皿で、復元口径9.8㎝、復元底径3.6㎝、器高2.8㎝を計ります。

, 青磁・

5世紀中葉、
ます。1に
6・7の
られていま
銘の一部の

元口径は、

葉、16は16
のです。呉
外器面に花
が見られま
形の皿で、

Ⅰ郭出土遺物

風炉について

「風炉」は、茶の湯の席上で、茶釜の湯を沸かす道具です。「面取」は、焚口(たきぐち)が方形に抉(えぐ)り取られている事を意味します。他方、焚口に横穴を穿(うが)った造りは「朝鮮風炉」と呼ばれています。

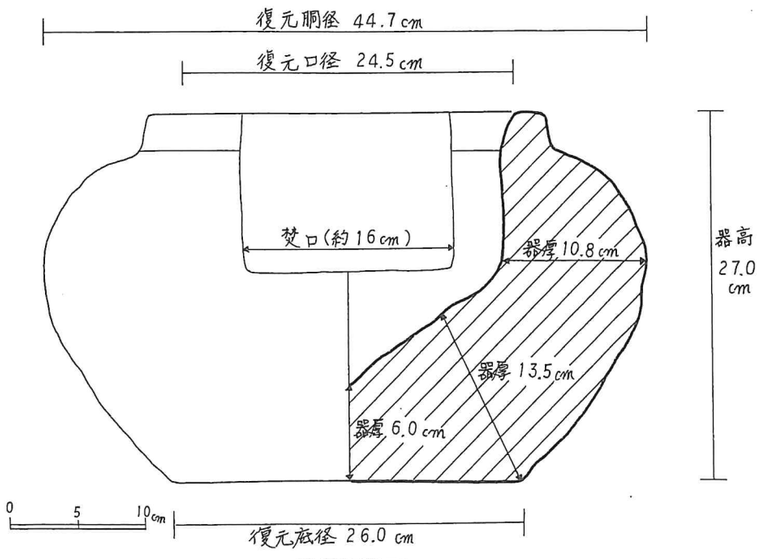
内部には、灰を敷き、炭火を用いました。胴部に比べて、口縁部が括(くび)れていますから、羽釜(茶釜)を乗せるやり方だった事が分かります（対して、幅広の口縁部のものは、内部に支えとなる「ごとく」を入れました）。

棚底城跡の「面取風炉」は、砂岩礫を加工した石製品で、全体の二分の一程度が出土しました。復元口径24.5㎝・復元胴径44.7㎝・器高27㎝を計ります。推定される焚口幅は、約16㎝。器厚は、10.8～13.5㎝。

棚底城主が、中央の文化人に習って、地元の石工に製作させたのでしょう。推定される重さは約50kg、外器面は、五輪塔の水輪を思わせる様な、丁寧な仕上がりになっています。同時に、天目茶碗片や茶臼などの茶道具も出土しました。

面取風炉〔出土品〕

〔複製品〕



風炉実測図